

246
13
198

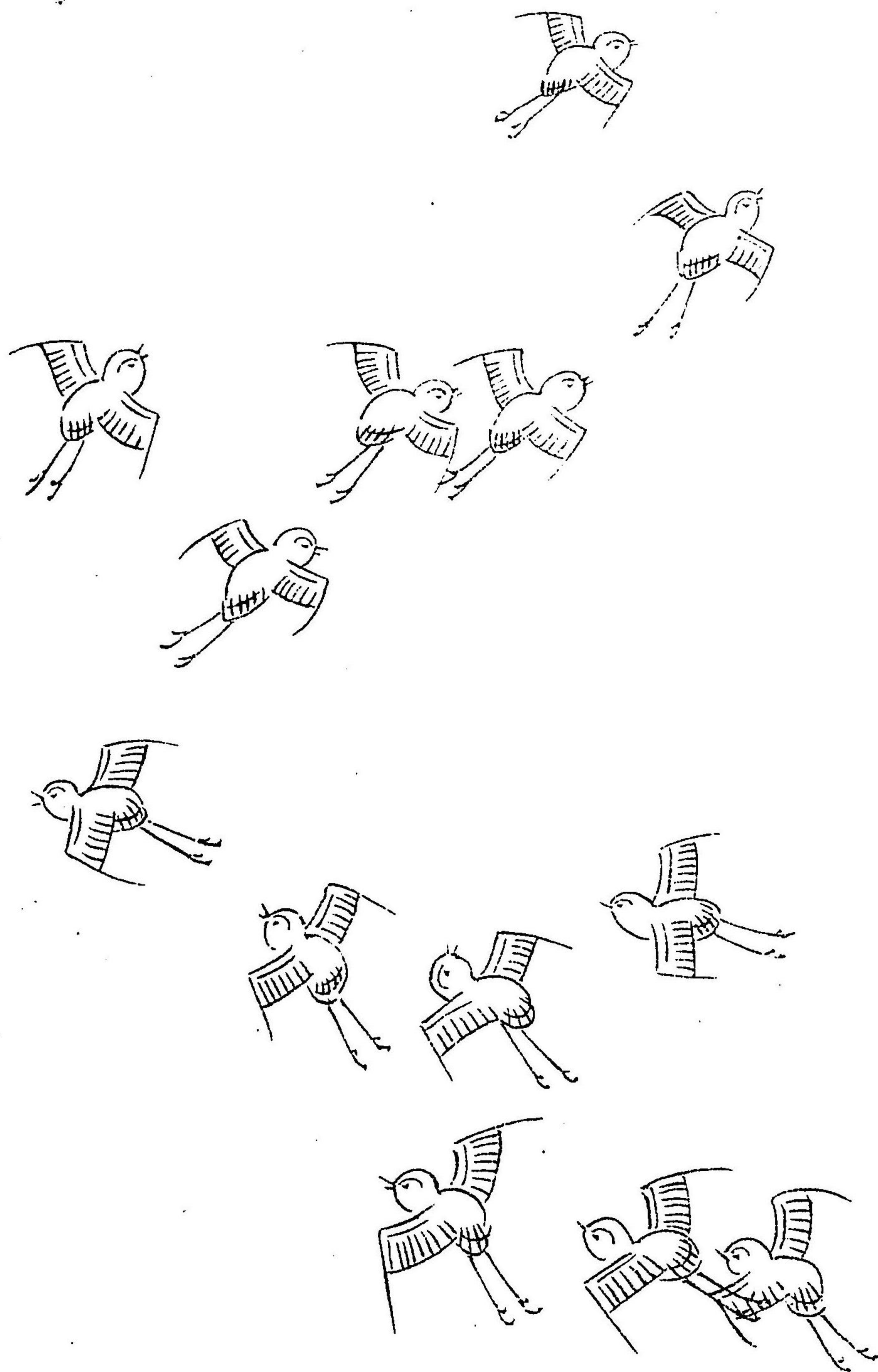
吳服
鷓鴣
高城
常麻

觀世流改訂儒本
内十一



清觀
長世

明治
43. 5. 31
内交



文學博士 井上頼国 本文監修

丸岡 柱 本文訂正

親世清之 節附訂正

脇能

吳服

九月ツシレテ 吳織前里女
ワキレテ 里女
臣下

早^{ツヨク}弟^サ道^{ミチ}に^ニ道^{ミチ}だ^ニら^ニ時^{トキ}そ^ニや^ク。冬^{フユ}中^{ナカ}ニ^ニサ^サツ^ツク
か^カら^ラん^ンそ^ソも^モく^クら^ラい^イ書^{カキ}今^{イマ}



よ^ヨは^ハな^ナら^ラん^ン下^カあ^アら^ラむ^ムは^ハ河^カ内^チ攝^{セツ}州^{シュウ}

復^{フタ}昔^{コト}よ^ヨの^ノ書^{カキ}信^シ守^{モリ}し^シて^テお^オも^モい^イま^マり^リ浦^{ウラ}

傳^{ツタ}へ^ヘり^リ。西^{ニシ}の^ノ書^{カキ}の^ノ書^{カキ}も^モあ^アら^ラむ^ムな^ナら^ラぬ^ヌ

三^ミ人^ニの^ノ書^{カキ}。長^{チカ}閑^{カン}の^ノ書^{カキ}も^モあ^アら^ラむ^ムな^ナら^ラぬ^ヌ

三。玉座の海士の着も
 直なる程皮馬行の海も若く得
 なる異服の用よさらばわたり
 眞一 異服織あやの衣の蒲甲の平鏡で
 位も海士が女 さらん家の
 白糸の襟織の保の音一
 眞一 津の國異服の用信とて
 眞一

三。人の者もしは國あつたは
 塵土の若くあや上昔の思ひ
 出づる日のSoraも海は路織も
 身方身塵人の平と鏡て。異
 服の用あやもさられたる若く
 眞一 上。あやの爲は入り機
 われ上。保の織の塵衣の音とて
 眞一

の.....

出.....

日.....

め.....

り.....

そ.....

に.....

早.....

そ.....

故.....

又.....

ゆ.....

そ.....

後へより。和國異教は道廣く人
の國まで靡く世のち日し亦長田
あるは代のき善くして國治又民豊
りなり。東南雲收りて西北は静
かなり。應神天皇は法皇のまよ
吳國の勅使汎國よ。初てきり流り
よ。後女系女の女婦と係入。萬里は愈

中。波を凌ぎきりて西月教のあき
服の里よ。まらひ車日よ。立つ機
おれ錦をさうくの後の衣裳をな
る。勅使養治あり。く。敷威強よ
長。それより名づけつ。衣龍の所
衣の紋管も名づき。山鳩色し。う
ア。つ。氣色したつ。あり。雲鳥。目ぶ

吳國

舞服の勢、松の月、又、磯の音

舞服の勢、松の月、又、磯の音

舞服の手繰の糸、わが歌の音

は、踏ませる音、わが歌の音

わが歌の音、わが歌の音

上、悪魔も怒る、勢もあがり、織女

の、袖、思ひ出で、織女

の、なま、ゆる、旅人の舞、精

霊、魂、舞、影、向、な、代、も

ま、ら、し、も、す、ら、宵、の、後、を、織、り、た

て、く、わ、が、君、よ、持、り、お、持、代、の、な、め

し、た、人、の、織、女、舞、服、あ、の、の、り

く、舞、服、あ、の、の、り、は、何

お、供、あ、る、代、も、め、で、た、け、し

二番目

鳴

三月
ワツキレ
源義経前連翁
僧夫

早瀬ヨラクも南に海原イノチや、鳴の浦を

尋ねん、引れ、都方より出でた

る備よ、い、ち、れ、ま、だ、四、國、を、見、ま、せ

い、程、よ、洪、度、田、を、い、ま、ま、ち、西、國、行、勝、と

志、い、ち、や、春、霞、を、ま、ま、ち、つ、は、の、け、り

あ、く、く、日、の、雲、も、影、深、ひ、て、そ、な

たの宮と行く程。遠くをのりし中。入
て。鳴り浦は着きし。つら。く。急

あつ塩屋のまぢり寄つ。宿のむらさ
き。あつ塩屋のまぢり寄つ。宿のむらさ

あつ塩屋のまぢり寄つ。宿のむらさ
き。あつ塩屋のまぢり寄つ。宿のむらさ

夜西嶽又傍うて宿も。曉湘水を
汲んで。杖を杖くも。今も。知
りて。蘆火のあげ。ほの見えを。も
も。て。ま。さ。な。ま。の。目。の。出。ぬ。け。中。つ
は。霞のおま。ご。め。れ。事。あ。て。あ。ま
の。あ。び。舞。の。里。辺。一。城。萬。里。れ
舟。れ。清。波。一。帆。の。風。は。ほ。ま。夕。べ。の

室の震り浪の行くはきき清そ
て震よりかき松原の産のみさるま
中 眺ろひて海岸そこも不知火の
飛港の海や續くらんそい入鳴
浦傳ひ海去れ家居も敷くよ
上 釣のいとまも波のぶく震み渡
り中行くや海去れお母のほのづと

見えし残りも暮道にまごも長閑
なる春の心は懐らなく 先づ塩
屋の岸の海をさきかきよめる 塩屋
のまの岸のしるもさきかき宿を借らぎ
しと思ひあつてさきかき塩屋の内
業のする海をさきかき 諸國
見し傳ひあつて宿の宿をさきかき

へーぞぐん^語て其てん^{ゲン}を曆^リえ^ワ平^シ百^{ハク}十^{ジュウ}八^{ハチ}日^{ニチ}して
事^{コト}あり^{マシ}一^{イチ}年^{ネン}家^ケの海^{ウミ}の百^{ヒャク}所^{ショ}た^タあり^{マシ}よ
松^{マツ}とら^トめ^メの^ノ氏^{ウヂ}は^ハひ^ヒひ^ヒなる^{ナリ}も^モ出^デで^テな^ナら^ラぬ^ヌよ
大^{ダイ}將^{シヤウ}軍^{クン}のは^ハじ^ジと^トな^ナり^リよ^ヨ赤^{セキ}地^チの錦^{キン}の直^{チキ}
垂^{タレ}は^ハ武^ム系^{ケイ}祿^{ロク}濃^{ノウ}の^ノ所^{シヨ}着^キ守^セ長^{ナガ}銘^{メイ}あ^アら^ラせ^セ
う^ウ鞞^クを^カま^サよ^ヨつ^ツの^ノま^マち^チあ^アら^ラづ^ズ一^{イチ}院^{イン}の^ノは^ハ使^シ派^パ
氏^{ウヂ}の^ノ大^{ダイ}將^{シヤウ}擧^ケげ^ゲ遣^{セン}使^シ五^ゴ位^イの^ノ射^{シヤ}深^{シン}の^ノ義^ギ

候^{カクシ}と^ト右^{ウエ}の^ノ派^ハの^ノは^ハ皆^ケぞ^ゾあ^アら^ラぬ^ヌ
大^{ダイ}將^{シヤウ}を^ヲ目^メえ^エ今^{イマ}も^モ思^シひ^ヒぞ^ゾら^ラ
して^{シテ}る^ル由^ユ時^ジ平^{ヘイ}家^ケの^ノ方^{カタ}よ^ヨも^モ言^{コト}葉^{エフ}戦^{セン}
以^{ヨリ}事^{コト}終^{ワケ}る^ル兵^ヒが^ガ油^ユ濃^{ノウ}か^カら^ラい^イは^ハあ^アら^ラぬ^ヌは^ハあ^アら^ラぬ^ヌ
際^{サカイ}よ^ヨ下^ゲら^ラい^イら^ラず^ズて^テ陸^{リク}の^ノ敵^{テキ}と^トな^ナら^ラぬ^ヌは^ハあ^アら^ラぬ^ヌ
保^ホの^ノ方^{カタ}よ^ヨも^モ續^ツく^ク兵^ヒ立^タ時^ジた^タあ^アら^ラぬ^ヌは^ハあ^アら^ラぬ^ヌ
と^ト三^{サン}保^ホの^ノ谷^ヤ一^{イチ}河^カと^ト右^{ウエ}の^ノつ^ツて^テ真^マを^ヲま^マさ^サす^ス也^{ナリ}

りし母を〜悪の平家の方の悪
七兵衛景清と名の三保の言と目懸
け戦ひの彼の三保の言と其時よ
カラム物アツカチ。まゝひの
まゝの口清の三保の言と着
なる境に鍾と桐で後入り
保の言も 糸と指と可入り

母の言も 糸と指と可入り
りし母を〜悪の平家の方の悪
七兵衛景清と名の三保の言と目懸
け戦ひの彼の三保の言と其時よ
カラム物アツカチ。まゝひの
まゝの口清の三保の言と着
なる境に鍾と桐で後入り
保の言も 糸と指と可入り

死の海を思ひ返る真珠の目た春の
夜あけの暁の影を今宵
の宮に昔の今思ひ出づるおと
との命戦の道早にすまへ春見え
ぬ武はし馬は射た柳のく
た身あつたまの前の道に津たぬ
と味あひひるまの海を新し
らで海は海の花の影を
た鏡の海に深き影を春に申
まあつて春の影を今宵の夜
にまの影を今宵の影を今宵
春の影を今宵の影を今宵
あつた影を今宵の影を今宵
あつた影を今宵の影を今宵

死の海を思ひ返る真珠の目た春の
夜あけの暁の影を今宵
の宮に昔の今思ひ出づるおと
との命戦の道早にすまへ春見え
ぬ武はし馬は射た柳のく
た身あつたまの前の道に津たぬ
と味あひひるまの海を新し
らで海は海の花の影を
た鏡の海に深き影を春に申
まあつて春の影を今宵の夜
にまの影を今宵の影を今宵
春の影を今宵の影を今宵
あつた影を今宵の影を今宵
あつた影を今宵の影を今宵

軍タガイは兵士ヤサキを揃ソグへ船フネを又マタ馬ウマを遣ツクり
て。諸シロちりりしく見ミあやむりば又マタを侵シム
して攻ツクめ戦タケひ其コノ時トキ行ユクたなりけ
ん判官ホオダマン平ヘイを取トり落オはせしめて
流ナガれし地上は其コノ時トキも引ヒくはな
さぬ書シく流ナガれし地上を敵テキのりし
取トりしナミ馬ウマは河カハの流ナガれしオヨせて敵テキ船セン

ゆへなりし地上敵テキのりしオヨて
りし船フネも事コトを熊クマ手テの懸ケひて既スデに
見ミえし地上は其コノ時トキも
手テの切キり拂ヒの銀ギンのりし取トりしオヨて
は春ハルの上に其コノ時トキも遣ツクりし
る。惜イハしむは其コノ時トキも遣ツクりし
時トキ申マウしぬ。其コノ時トキも遣ツクりし

一、足、た、め、惜、ま、ぬ、一、命、あ、い、が、あ、ま、
 一、捨、て、と、ま、後、記、も、も、は、石、を、あ、ま、さ、し、ま、
 一、弓、筆、は、跡、あ、る、べ、け、れ、又、世、罪、道、
 一、け、國、の、勢、上、地、、あ、ひ、び、の、音、震、動、せ、
 一、り、カ、タ、キ、け、よ、の、修、罪、の、敵、作、ぞ、な、ま、
 一、独、又、軍、の、守、教、伝、と、も、あ、ま、あ、ま、
 一、垂、の、知、り、ぬ、思、ひ、ぞ、あ、づ、る、檀、の、浦、に、

身

三

一、其、軍、令、も、も、く、上、國、は、よ、帰、る、
 一、生、死、の、海、山、一、同、の、震、動、し、て、
 一、國、は、勢、シ、テ、、陸、よ、は、波、の、楯、地、、ヤ、、上、シ、テ、、ヨ、ル、、ト、、ナ、
 一、ら、も、シ、テ、、カ、、ノ、、光、、地、、は、、暗、、ら、、也、
 一、の、星、の、教、ト、、日、、水、、空、、行、、も、、又、、雲、
 一、け、は、の、勢、チ、、テ、、人、、令、、一、、違、、あ、、る、、軍、
 一、の、あ、け、ひ、あ、い、な、か、た、あ、い、な、か、春

身

ハ夜のはまらけりて敵と見えり
群れ居る鴨。岡の勢と向えり浦
凡ありけり高松の浦凡ありけり高
松の勢凡ありけりなるりけり。

重習

鴨嶋小町

三月
ワキテ 小野小町
大納言行家

早稲
とら陽成院ははななる新大納言
行家よりさそもむら若敷湯の道
まほ公におひらひ昔く教を授せら
れひく。巖慮よけよ教ありそ
よ出羽の岡小野は女實ら娘よ小野
は小町。いそびあき教の上平よ

して。今。百年の楚^{ツク}ありて。關^{クワン}寺^ジ
 かに。あ。い。の。一。回。一。回。及。び。て。帝^{カミ}
 あり。は。あ。ま。り。は。教。を。た。り。て。其。の。教^{キョウ}
 あり。て。重。なる。題。を。た。り。て。宣^{ノボ}
 旨。を。傳。へ。今。關^{クワン}寺^ジは。小。野。の。小。町。が
 方。へ。と。多。き。ま。り。て。身。を。た。り。て。宣^{ノボ}
 松。坂。の。田。の。宮。に。宣。へ。て。宣^{ノボ}。り。と。又^{マタ}

六。つ。の。卷。あ。り。て。昔。の。世。に。宣^{ノボ}。は。た
 たり。身。な。り。て。今。の。世。に。宣^{ノボ}。は。た
 と。なる。類。を。た。り。て。宣^{ノボ}。は。た。入。肌。に
 凍。梨。の。梨。け。れ。枝。つ。あ。り。て。力
 も。な。り。人。を。怒。り。身。を。た。り。て。宣^{ノボ}
 笑。ら。り。あ。り。て。宣^{ノボ}。は。た。入。肌。に
 上。り。て。宣^{ノボ}。は。た。入。肌。に
 ヤ。ウ。ら。り。て。宣^{ノボ}。は。た。入。肌。に

三
 高景の九十九髪名あはれかたせ
 ありと昔の徳よひあり昔の
 夢の縁家甲たかきとふもあはれた
 たり甲あはれかたせ甲あはれた
 ありと昔の徳よひあり昔の
 夢の縁家甲たかきとふもあはれた
 たり甲あはれかたせ甲あはれた
 ありと昔の徳よひあり昔の
 夢の縁家甲たかきとふもあはれた
 たり甲あはれかたせ甲あはれた

ありと昔の徳よひあり昔の
 夢の縁家甲たかきとふもあはれた
 たり甲あはれかたせ甲あはれた
 ありと昔の徳よひあり昔の
 夢の縁家甲たかきとふもあはれた
 たり甲あはれかたせ甲あはれた
 ありと昔の徳よひあり昔の
 夢の縁家甲たかきとふもあはれた
 たり甲あはれかたせ甲あはれた
 ありと昔の徳よひあり昔の
 夢の縁家甲たかきとふもあはれた
 たり甲あはれかたせ甲あはれた

春霞ハルカ 望のぞみ 白しろ雲雲 見みて 雲雲を 見みる

指ゆびの 懸かる 白しろ雲雲 見みて 見みえ

て 白しろ雲雲 見みて 見みえ 見みえ

て 見みえ 見みえ 見みえ

見みえ 見みえ 見みえ

見みえ 見みえ 見みえ

見みえ 見みえ 見みえ

観かん世せ音おん執しつ因いん長ちやう橋きやう相そう入にゅうののりりななまま

て 慈じの 慈じの 慈じの 慈じの 慈じの

慈じの 慈じの 慈じの 慈じの 慈じの

慈じの 慈じの 慈じの 慈じの 慈じの

慈じの 慈じの 慈じの 慈じの 慈じの

慈じの 慈じの 慈じの 慈じの 慈じの

乙卯(田)家老恩の^甲いふるに^甲ま^甲に^甲
 乙卯(田)いふるに^甲ま^甲に^甲
 有長乙卯(田)いふるに^甲ま^甲に^甲
 乙卯(田)いふるに^甲ま^甲に^甲
 乙卯(田)いふるに^甲ま^甲に^甲
 乙卯(田)いふるに^甲ま^甲に^甲

乙卯(田)家老恩の^甲いふるに^甲ま^甲に^甲
 乙卯(田)いふるに^甲ま^甲に^甲
 乙卯(田)いふるに^甲ま^甲に^甲
 乙卯(田)いふるに^甲ま^甲に^甲
 乙卯(田)いふるに^甲ま^甲に^甲

.....
.....
.....¹⁰
.....¹⁰
.....¹⁰
.....¹⁰
.....¹⁰
.....¹⁰

.....
.....¹⁰
.....¹⁰
.....¹⁰
.....¹⁰
.....¹⁰
.....¹⁰
.....¹⁰
.....¹⁰
.....¹⁰
.....¹⁰
.....¹⁰
.....¹⁰
.....¹⁰
.....¹⁰
.....¹⁰

て。い。ま。か。ん。は。い。な。は。し。の。所。の。傍
又。た。な。は。あ。り。ま。し。て。い。ま。も。お
あ。た。な。は。あ。り。ま。し。て。い。ま。も。お
わ。い。と。し。ま。し。ま。し。て。い。ま。も。お
ま。あ。り。ま。し。て。い。ま。も。お
て。い。ま。も。お。り。ま。し。て。い。ま。も。お
わ。い。と。し。ま。し。ま。し。て。い。ま。も。お
わ。い。と。し。ま。し。ま。し。て。い。ま。も。お
わ。い。と。し。ま。し。ま。し。て。い。ま。も。お

ま。あ。り。ま。し。て。い。ま。も。お
わ。い。と。し。ま。し。ま。し。て。い。ま。も。お
わ。い。と。し。ま。し。ま。し。て。い。ま。も。お
わ。い。と。し。ま。し。ま。し。て。い。ま。も。お
わ。い。と。し。ま。し。ま。し。て。い。ま。も。お
わ。い。と。し。ま。し。ま。し。て。い。ま。も。お
わ。い。と。し。ま。し。ま。し。て。い。ま。も。お
わ。い。と。し。ま。し。ま。し。て。い。ま。も。お
わ。い。と。し。ま。し。ま。し。て。い。ま。も。お
わ。い。と。し。ま。し。ま。し。て。い。ま。も。お

野村田

けいこちあてが頼りともまじりぞい
 てもけぞと名子。聖賜の鳥は如
 ぶ。教の返教もあてあなまは
 聖賜づーる申まあり。名
 教の授けはまろひまの教。思はる
 てもあなまの教。かかたての
 集めて教へのまきまゝある申。

の小町にああるそのまじりなす。教は
 授け入る。まろひまの教。思はる
 家。書はまろひまの教。思はる
 和教の古義と守ね。まろひまの
 教。まろひまの教。思はる
 みるあれまろひまの教。思はる
 れ。餘情のたし作らぬ。

夢び柳發しほのつらなるありあり。淡葉はな草くさの
松動まつきゆりり繁花はなの名のみななり
しも今いまもも昔むかしととななりありて身み
神かみ波なみ濤うしほもも小こ町まちぞぞ衰しへあつつてつ
早のの小こ町まち。淡葉はな草くさの名のみななり
の名のみななり。淡葉はな草くさの名のみななり
淡葉はな草くさの名のみななり。

もも同どうくくもも都みやこの名のみななり。
いいふふ言ことばにに言ことばの名のみななり。
和わ歌うたの名のみななり。淡葉はな草くさの名のみななり。
よよううつつの名のみななり。淡葉はな草くさの名のみななり。
廻めぐららもも信しんじじの名のみななり。淡葉はな草くさの名のみななり。
後のちの名のみななり。淡葉はな草くさの名のみななり。
の名のみななり。淡葉はな草くさの名のみななり。

四番目

葛城

十一月
ワキ

葛城神前女
山伏

早第
ツク

神の昔跡とめてく葛城山

ふまらんこれお羽の羽里あより

おでならお伏とていおれは度々お葛

城よまきぎやとあいの藤懸行袖

の鈴霜起殿のうく岩根の枕松が

根け宿りもあまは頼つべきと又いふ

わが越えたる山はなほ大なる山なり
葛城の山はなほ大なる山なり
葛城の山はなほ大なる山なり

同。山はなほ大なる山なり
葛城の山はなほ大なる山なり

あはれなる山はなほ大なる山なり
あはれなる山はなほ大なる山なり
あはれなる山はなほ大なる山なり

あはれなる山はなほ大なる山なり
あはれなる山はなほ大なる山なり
あはれなる山はなほ大なる山なり
あはれなる山はなほ大なる山なり
あはれなる山はなほ大なる山なり
あはれなる山はなほ大なる山なり
あはれなる山はなほ大なる山なり
あはれなる山はなほ大なる山なり
あはれなる山はなほ大なる山なり
あはれなる山はなほ大なる山なり

甲
 ねはてはるをきりて浦に別れ
 なるは路をさるる。今て次雷の前後
 を高きてはる。序表ありあはるる
 へ諸は宿りの行慶を。女
 のあまたなる。谷下下庵見替くす。
 宿のみの晴向も。は。か。と。休。め

小談

終る。早見
 のより書。陰。まり。女。あ。む。あ。
 ま。山。傳。ひ。と。早。の。の。
 筆。の。重。一。品。の。雪。背。の。青。を。林。地。
 の。花。上。有。着。上。は。美。よ。無。影。け。
 月。を。傾。け。擔。頭。の。染。よ。不。吉。は。花。を
 を。折。り。つ。る。若。く。は。花。の。心。の。美。も。新

甲^ニ 甲^ニ 乙^ニ 丙^ニ 丁^ニ 戊^ニ 己^ニ 庚^ニ 辛^ニ 壬^ニ 癸^ニ
 も増^フも^シして。庚^ニの^ニそ^ノら^ハの^ニ道^ノを
 た^テら^ズく^ハ何^レも^カし^テ涼^シの^ニ清^ニも^シ着^ス
 ぬ^レらん^カ。甲^ニ 早^クも^シ今^レは^カ雪
 乙^ニ前後^ノは^カ何^レも^カし^テ涼^シの^ニ清^ニも^シ着^ス
 ぬ^レらん^カ。甲^ニ 早^クも^シ今^レは^カ雪
 丙^ニ夜^ニ寒^クなる^ニは^カ何^レも^カし^テ涼^シの^ニ清^ニも^シ着^ス
 ぬ^レらん^カ。甲^ニ 早^クも^シ今^レは^カ雪
 丁^ニノ^ニ寒^クなる^ニは^カ何^レも^カし^テ涼^シの^ニ清^ニも^シ着^ス
 ぬ^レらん^カ。甲^ニ 早^クも^シ今^レは^カ雪

甲^ニ あい^ハ白^ニ鳥^ノ標^トと^シは^カす^レて^カる^ニは^カら^ズ
 女^ニ り^ニな^ルも^シあ^ハし^テ鳥^ノ標^トと^シは^カす^レて^カる^ニは^カら^ズ
 集^メの^ニた^ラま^シて^カる^ニは^カら^ズ 標^トと^シは^カす^レて^カる^ニは^カら^ズ
 ぬ^レらん^カ。甲^ニ 早^クも^シ今^レは^カ雪
 乙^ニ 身^ヲ法^トと^シは^カす^レて^カる^ニは^カら^ズ 標^トと^シは^カす^レて^カる^ニは^カら^ズ
 丙^ニ 女^ニ あ^ハら^ズか^ラぬ^レらん^カ。甲^ニ 早^クも^シ今^レは^カ雪
 丁^ニ 女^ニ あ^ハら^ズか^ラぬ^レらん^カ。甲^ニ 早^クも^シ今^レは^カ雪
 戊^ニ 女^ニ あ^ハら^ズか^ラぬ^レらん^カ。甲^ニ 早^クも^シ今^レは^カ雪

なるよ。深草城はるる寄せたり。れ
 大和神の教と云入り早カレけよぐ舊ま
 大和舞の教の昔を思ひ出れ女女折
 あり雪も早降るもれや上あは標ヒ結よ
 尊性尊の降る雪のく向あ時時なか
 思ほゆホモら入あ地なよゆいゆきゆ教の昔ハしハ真ハ深
 入入大和神の袖の雪も雪舊舊かかして美

仕舞

よきよの又見う白雲も高向の殿の
 深草の夕煙松が枝ほへて焚ありよ松
 が枝ほへて焚ありよカセ尊性尊やまイれ
 向よ向老る指書指のひひののありありははおおいいそそ
 見見ののびびののせせの中中のの電電光光朝朝露露のの
 火火けけ光光のの向向ぞぞとと思思入入作作枝枝がが身身れれ教教
 ををもも取取りり添添入入てて思思ひひ真真深深をを焚焚ありありよよ

上女
 捨て人の暮し衣のきほくはなほ
 黒染の袖もさあぐら白妙の帯も
 色もさあぐらなれば
 標を集め染を林まき寒風を
 津の山伏の名もあはれ敷く袖は
 枕して身を休め逢ふは身を休め
 逢ふあはれや藤懸を乾して

いそや。急ぎ。後夜^{ゴヤ}の勤^{ツツ}と始^{ハジ}めを
 と思ひ。女^メ身^ミ勤^{ツツ}とあはれな
 惱める心あは。古^コ勤^{ツツ}のついで。新^ニけ
 加持^{カチ}して賜^{タマフ}ついで。早^{ハヤ}そもは。女^メ身^ミ
 心をあつと。女^メ身^ミあつと。女^メ身^ミ
 した。女^メ身^ミあつと。女^メ身^ミあつと。女^メ身^ミ
 のいあけ。女^メ身^ミあつと。女^メ身^ミあつと。女^メ身^ミ

ねり葛城ツタカヅラのそらとてまてめて。ねり
 熱の若早カケ又あり。洗身を動かしてなび
 浴へ。そら神あごと熱の若早カケ又
 とらねりあひかた。船舟あつ古
 のほし居梅イワハメかまひかこ。梅あひあひ
 ねりの葉〇サツシのそらとてあひあひ。あひ
 若早カケ又絶えぬあつ。あひあひあひあひ

のほしあひあひ。若の葛城の神は
 若早カケ又つきかき。女メあひあひ。神カミ
 と。早早カケ葛城のあひあひ。女メあひあひ。梅
 つらひ書かへ。早早カケあひあひ。あひあひ
 りそ。女メ露は置られ。霜は青あひあひ
 起オキのまマあひあひ。あひあひ。あひあひ
 くらび。あひあひ。あひあひ。あひあひ。若

一、又あり新りか持してはびやく
 一、と岩橋に末絶えて神隠しぞ
 一、かりよひの早考岩橋の昔れ
 一、衣の袖透入して法の甚れ
 一、は法味をあらしてよまがらあけ
 一、首城の神慮の行以勢隆又
 一、て心教に出端ちれ首城はよ
 一、中ノ待讀ヨク

一、まがら和をけ量り観れて五衰
 一、の眠を無ふにそえの目よ實は法
 一、は真如の實のよは法味よりして
 一、まうなりよく勤めおそまを
 一、あまやあ職ならしき幸陰より
 一、女神の神とあうそなまれ簪
 一、玉尊れおほ懸けほりて尊尊れ
 一、早カレ
 一、ツク

まひまひとさるるふぶ衣ヨク衣ハコらひ衣ハコ結ヒ
ふぶ衣ハコのハコ標ヒあらハコ身ハコをハコくハコあハコめて
早ハコ衣ハコにハコ執ヒ行ハコ神ハコ慮ハコ早ハコ衣ハコのハコ標ヒ
早ハコ標ヒ結ヒみハコ葛城ハコのハコ石ハコ橋ハコのハコ標ヒ
あれどハコ石ハコ橋ハコのハコ標ヒもハコくハコしハコるハコあハコれハコ神ハコ
神ハコのハコ見ハコ者ハコもハコきハコ顔ハコをハコせハコしハコ神ハコはハコまハコりハコ
恥ハコづハコやハコよハコいハコ芳ハコ野ハコのハコ山ハコ草ハコあハコけハコりハコ

●仕舞

通ハコ入ハコりハコ石ハコ橋ハコのハコ高ハコ天ハコけハコ原ハコらハコいハコれハコあハコれハコ
わハコ神ハコ樂ハコ歌ハコ始ハコめハコてハコ大ハコ和ハコ舞ハコいハコぎハコやハコ奏ハコ
るハコ上ハコ階ハコのハコ標ヒ本ハコ緯ハコ花ハコのハコ白ハコ和ハコ
幣ハコ高ハコ天ハコのハコ原ハコにハコ懸ハコけハコれハコまハコいハコひハコ
くハコ天ハコのハコ香ハコ具ハコもハコ白ハコひハコ目ハコ見ハコえハコたりハコ
白ハコくハコ雪ハコ白ハコくハコうハコづハコれハコもハコ白ハコ妙ハコのハコけハコ
まハコあハコれハコもハコあハコいハコ首ハコ飾ハコのハコ神ハコはハコ

自かたもがもあもを母と申す
や清きもあもを母と申す
あけぬ前よと書目性の記はぬ前よ
と首城たよの殺るよぞ入り給
か、蘇屋の内よ入り給よ。

五九番目習

界協能

當麻

二月ツシテ中將姫前免尼
ワキ化尼旅僧

ヨク

教へりまは法の用く道

ふとぞあまの念佛の行者よて

あゆむは後三熊野のまへ下向道よ

起あきすんふとよんがむ路あけ當麻

後昔のあまのついであはれ給よな

後記の時の開城あきすんふとよ

熊野の岩田はもと叢あり給有景
夜畫わらぬ心ちして雲もそあなよ素
かりて上りし林原あり當麻し寺よる
きまわしりし今もびり佛身滅無
量衆もも從りたり一萬諸宗教
當是く心ちてあつるも釋
書りて道すく筋ありま

第五

南無に強て佛と稱せり佛
もあまありけり南無に強て佛
の教をりし流し者頼も
得もあまありけり南無に強て佛
の五色より染みぬるあまな
法佛の教をりし流し者頼も
悲れども味びの中よ強よね五

の雲の晴れぬ雨夜の口を教へたよ
 知らぬにせまへぬ由くはらへる頼
 けんがも頼めぬを借入るに遠く馬
 上号
 らるや来せぬに味もあつらふ為あり
 後を残すは法にぞし教へて
 院の教を頼もまへ来せ法萬年
 のかへては縁の法にあらぬま

なもはかむわおもはぬとせせぬ松し
 ののくはらへる道へもて法の場を交
 るあはは法の場を交ひぬる早
 なもはかむわおもはぬとせせぬ松し
 甲
 るあはは法の場を交ひぬる早
 甲
 麻葉の甲の甲の甲の甲の甲の甲の甲

と。濯ぎて清め。其敷又深敷の井と
も。まもとる。あれ。唐麻寺。あれ
深寺。又。池の深敷の色。様。
可。どの法の見佛。因法ありとも。それ
も。ま。白糸。作。筋。心。不。乱。の。南
無。阿。弥。陀。佛。ひ。あ。る。ま。の。の
言。察。即。ち。い。ひ。ま。い。ふ。深。心。教。あり。か。

又。い。ま。の。を。様。昔。ま。の。の。の。の。
ら。も。敷。あ。る。寶。持。と。見。え。た。り。ま。
よ。く。は。た。り。ま。の。ひ。ら。れ。た。り。あ。れ。ま。の。違。
け。糸。を。染。め。て。掛。り。て。乾。か。れ。様。ま。
の。花。の。は。し。め。あ。い。ま。の。深。心。の。ま。の。の。の。
ア。ア。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。
成。佛。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。

申して居る所にて獄と申すは
山と云ふ人にと眞の山にありし
ある故に此の獄と申すあるもの
坂を登りて居る所にて獄と申すは
雲に居る所にて獄と申すは

高き山にありし獄と申すは
待望 高き山にありし獄と申すは

光る教養の山にありし獄と申すは
まはるる山にありし獄と申すは
中に見れたる山にありし獄と申すは
れは山にありし獄と申すは
時を待たざりし獄と申すは
安樂の山にありし獄と申すは
の山にありし獄と申すは

幸しくして。法身却來して法集を
 せり。ありがたむ。盡く空寂にして
 巖の眼の雲路を静ま。静妙法輪の
 音聲は。聽寶刹の自ら又充てり。蕭
 然とある時の心。真の清くも清くは
 引るる。老衰の心。執措さるる。あぐ
 時の人。も待たざる。も。易きとぞ。

仕舞

心の静土に。戴き。ま。あ。れ。り。

取不捨。為一切世向。説法。信

之法。是。為。甚。難。

信。も。信。ま。ら。り。も。糴。る。べ。し。

頼め。頼め。頼め。頼め。

頼も。一。舞。ぞ。あ。り。が。た。む。

地今。心。を。静。め。ん。

地心。を。静。め。ん。

地心。を。静。め。ん。

地心。を。静。め。ん。

地心。を。静。め。ん。

地心。を。静。め。ん。

地心。を。静。め。ん。

地心。を。静。め。ん。

地心。を。静。め。ん。

地心。を。静。め。ん。

地心。を。静。め。ん。

地心。を。静。め。ん。

地心。を。静。め。ん。

地心。を。静。め。ん。

地心。を。静。め。ん。

地心。を。静。め。ん。

侍

の鐘の音に鳥籠の細言は居れば
音の目録に法の色を法に
若きも老は遍照十方の新生
西方の如く法法の毎に水新持
法の如く法法の毎に水新持
の如く法法の毎に水新持
の如く法法の毎に水新持

明治四十三年五月二十日印刷
明治四十三年五月二十五日發行

訂正者ノ檢印
ナキモノハ偽版也



訂正兼發行者 丸岡桂



印刷者 塚原錦三郎

東京市下谷區二長町壹番地

印刷所 凸版印刷株式会社

東京市麹町區中六番町廿九番地

發行所 觀古流改訂本刊行會

電話番町二五四四番

246
13
198

